

燃え上がれ！町を駆ける希望の炎



▲1964年に上峰町内を駆ける原槇さん

待ちに待った、7月の東京2020オリンピックの開会式まであと3か月。オリンピック聖火が3月に日本に届き、宮城県からオリンピック聖火リレーが始まり、佐賀県には5月10日(日)に到着します。2日間にわたって県内でオリンピック聖火リレーが実施され、約180名のランナーが走行します。

上峰町を代表して走るのは、東京1964オリンピックでもオリンピック聖火ランナーに選ばれた原槇和彦さん。病に立ち向かい、強い想いで挑む姿をご紹介します。

日本中が沸いた1964年

1964年、日本で初めて開催される東京1964オリンピックに全国民が熱狂しました。

なかでも、古代オリンピック発祥の地であるギリシアから運ばれるオリンピック聖火を数か月にわたってリレー形式で繋ぐオリンピック聖火ランナーは憧れの存在。

9月15日に佐賀県に渡ったオリンピック聖火は43区間、84kmを989人がつなぎました。

その一人として燃え盛るオリンピックトーチを握ったのが、当時19歳の原槇さんです。短距離が得意で全国大会にも出場するほどの実力者で、青年団として地域のために活躍していました。

「当初は責任の重さがよく分かっていませんでしたが、事前練習の内容が大変厳しくて、事の重大さを実感しました。本番をイメージして一升瓶を逆さまに持ち、肘を直角にした状態で走るので

取材協力
原槇 和彦さん

1945年上峰町生まれ。1964年に開催された東京1964大会でオリンピック聖火ランナーとして町内を走行。上峰町区長会会長として地域の安全安心や課題解決に向けて尽力したことが評価され、今年の東京2020のオリンピック聖火ランナーとして2度目のオリンピック聖火ランナーを務める。



▲聖火トーチを持つ原模さん

すが、姿勢を維持するのがきつかったです
ね」と当時を振り返ります。

迎えた9月16日、久留米分岐の交差点に
立った原模さんは沿道を埋め尽くす観
衆に圧倒されたそうです。

「受けついだオリンピック聖火を次の
人に、確実に渡さねばという使命感と、
失敗できないと責任感でいっぱいでした。
大きな声援がありがたかったですね。後
続のオリンピック聖火ランナーに私の友
人もいたので、次の走者に受け渡す時は
『よろしく頼む』という思いでした。テ
レビで開会式を見ましたが、聖火台に点
火されたときの感慨といった言葉にで
きません」と瞳を輝かせます。オリンピッ
クトーチのレプリカやその時の衣装も大
切な思い出として残してきました。

もう一度、走る

議員や区長として上峰町のために尽力してきた
原模さんは昨年4月、頸椎損傷のけがを負い入院
生活を強いられます。症状は重く、医師からは車
椅子生活ができるようになれば良い方と診断され
ました。

両手足に麻痺があり、入院中だった6月に東京
2020大会のオリンピック聖火ランナーの募集
を知り、知り合いのすすめで応募を決意。決定を
受け、原模さんの挑戦が始まりました。

「人から見れば、無謀で大きな夢と笑われるか
もしれません。ですがオリンピック聖火ランナー
の重みを知るからこそ、何としても歩けるよう
になると腹を決め、その役目を果たすために毎日毎
日厳しいリハビリにも取り組んできました。私
の姿が同じ頸椎損傷の人の励ましになれば嬉し
いです」と笑顔
を輝かせます。



▲1964年当時の
ユニフォーム

弱音を吐かず、人に甘えず、全てがリハビリと
取り組み、驚異的な回復で10月には杖をつきなが
らも自分の足で歩いて見事退院。今もリハビリを
行い、歩く練習を続けています。

「到着時間が決まっているので時間内で完走し
なければなりません。人生で2度オリンピックを
迎えられることも貴重なのに、オリンピック聖火
ランナーという大任を務めさせてもらえるなんて
感謝しかありません。受けたからには一生懸命や
り遂げます」と力強く決意を語る原模さん。

5月11日の本番を目指し、寒風に向かって希望
の炎を大きく燃やし、一步一步確かに足を踏み出
します。



▲1964年当時の聖火ランナー隊

お問い合わせ 生涯スポーツ係 52-3833